

ZOCALO 2021 12 2022 1

ZOCALO=ソカロはメキシコの都市の広場を意味するスペイン語。埼玉県立近代美術館はアートを通して交流する市民の広場をめざしています。

サマー・アドベンチャー 「新聞紙とガムテープで生き物をつくらう！」 関連プロジェクト

当館では、美術館での”できごと”を楽しむというコンセプトで、ワークショップ「MOMASのとびら」を主に土曜日に開催しています。夏休みはその拡大版、「サマー・アドベンチャー」となります。昨年度はコロナ禍の影響で中止、今年度も開催が危ぶまれる中で企画でしたが、無事全4回のワークショップを開催することができました。そのうち、8月21日(土)は、現代芸術家の関口光太郎さんを講師にお招きし、小学生以上を対象に新聞紙とガムテープで自分の好きな生き物を作るワークショップを行いました。当日は参加者の皆さんに存分に楽しんでいただきましたが、実は今回のワークショップ、お楽しみは当日だけではありませんでした。この夏、館内で展開されたワークショップ関連プロジェクトについて紹介いたします。

プロジェクトが始まったのは、7月22日の朝。ワークショップの1か月前でした。コロナ禍でそれまで展示していたグッドデザインの椅子の設置が難しくなりすっかり寂しくなってしまった1階ギャラリーに、たくさんの新聞紙とガムテープを携えた関口さんが



滞在制作の様子

いらっしゃいました。この日から、ワークショップに向けた関口さんの滞在制作が始まったのです。最初に芯となる木材が設置され、少しずつ新聞紙とガムテープで作られたパーツが付けられていったのですが、その段階では全く予想が付きません。何が出来るのだろうと楽しみにしていると、日に日に様々な植物や動物の形が現れ、大きな手足が作られ、まだその場では全てを組み立てていないものの、作品は圧倒的な存在感でした。滞在制作は来館されたお客様にも自由にご覧いただきました。じっくりとご覧になる方、その迫力に驚くご家族、毎日のように見に来る子。ワークショップはコロナ禍により人数が限られていましたが、多くの方にお楽しみいただけました。

ワークショップ前日、関口さんと職員で作品を地下1階展示室へ移動しました。それまで作品はパーツごとに作られていたのですが、この日、全てが組み合わさりました。作品は展示室の天井まで届く巨大なものでした。それは、コロナ禍での関口さんの考えが反映された作品でした。アメーバ、古代生物、恐竜、類人猿、人類…という流れで、生き物の進化の過程が表現されているのですが、人類は最初から出直すべきなのかもしれないという考えから、生き物の進化を着ぐるみにして纏っている赤ちゃんを表現されたそうです。それに合わせて、最初の生き物が誕生した海も、展示室の隅に新聞紙で表現されました。全体像は壮大ですが一つ一つの生き物を見るとそれぞれが魅力的で愛らしく、しかし人類が今、乗り越えるべき課題に直面していることも感じて心が揺さぶられました。

そして迎えたワークショップ当日。参加者の皆さんが集まった部屋には関口さんの姿はありません。集合した後、まずは関口さんの作品を見るために展示室へ移動します。作品と対面した参加者はその大きさに驚き、たくさんの表現されているものを発見し、職員もそうであったように興味津々でした。では、講師に登場してもらいましょうと関口さん



関口さんの作品を見るワークショップ参加者



「新聞紙の海」から登場した関口さん

をお呼びすると、なんと、関口さんは「新聞紙の海」から登場されたのです！参加者にとって衝撃の、そして楽しい関口さんとの出会いでした。気分も高まり、作品づくりに進みます。会場を移動する前に、材料として「海」から新聞紙を集めます。両手いっぱい持ってきた新聞紙を使って作品づくりが始まりました。関口さんのレクチャーを受け、好きな生き物を新聞紙とカラーガムテープで作っていきます。作られた生き物はバラエティ豊か。かわいらしい動物、かっこいい恐竜、触覚や脚までこだわった昆虫。自分の家族を表現した子もいました。今回は作品が出来て終わり、ではありません。参加者の作品を関口さんの作品に乗せたり近くに展示したりして、コラボレーション作品となりました。

関口さんと参加者の思いが込められた作品は、8月22日から9月4日まで公開しました。短い期間でしたが、大変多くのお客様が来場され、鑑賞を楽しまれました。コロナ禍で美術館の普及事業は制限され、ご要望にお応えすることができない期間が続きました。今回、関口さんのお力をお借りして、皆さまに楽しんでいただける場を作り上げられたことは、担当者にとって大きな喜びです。美術館での”できごと”が多くの方の素敵な思い出となり美術館との架け橋になれば、そのような思いで今後も取り組んでまいります。(Y.R.)



関口さんと参加者のコラボレーション作品

テレビ放送のお知らせ

この関口光太郎さんのワークショップ関連プロジェクト(滞在制作等)の様子は、テレビで放送されます。

番組: NHK BSプレミアム「ドキュメント720時間」
放送日: 12月3日(金) 23:15 ~ 23:44(予定)

特集：中野四郎

MOMASコレクション第3期
2021年10月23日(土) ~ 2022年2月6日(日)

MOMASコレクションでは、彫刻家・中野四郎(1901-1968年)の特集展示を開催しています。中野四郎は、東京美術学校(現東京藝術大学)で高村光雲、関野聖雲に木彫を師事しました。埼玉大学で県内の後進を育成したほか、埼玉県展の創設にも携わるなど、県を代表する彫刻家として知られています。当館では、初期の木彫作品をはじめ中野の代表作を多数収蔵していますが、近年



MOMASコレクション第3期ポスター

はまとまった展示の機会がありませんでした。今回の特集は、当館が収蔵するほぼ全作品を展覧し、中野の足跡を再検証するものです。遺族のもとに残された資料の調査や、彼に師事した県内作家への聞き取りを通じて、彫刻家仲間との協働の様子を解き明かすことを目指しました。

1933年、中野は東京美術学校彫刻科木彫部の卒業生たちと「九元社」を結成します。若手彫刻家たちによって創設されたこの団体は「何の党派にも流派にも属しない」(※1)ことを謳い、意欲的な活動を約10年間にわたって継続しました。活動期間はそのまま戦争期と重なっており、実際彼らは造園家たちとの共同研究として「大東亜聖戦記念緑地試案」を発表するなど、国家貢献を志向した試みを行いました。中野は「協同製作の考察」と

いう文章の中で、資材不足などにより作家個人の制作活動が困難になっている状況を指摘し、集団としてモニュメンタルな仕事に取り組むことの重要性を訴えています。(※2)

戦局の悪化により九元社の活動は1944年に幕を閉じますが、敗戦後の1951年に再集結し「創型会」が結成されました。中野四郎は自宅を創型会の事務所とするなど中心的な役割を果たしており、遺族のもとには創型会展の貴重な記録が残されています。ここでは、その中から2枚の写真をご紹介します。第9回創型会展の写真(図1)には、彫刻作品と花壇を前に並ぶ会員たちが写っています。戦後の資材不足により金属や木材の確保が困難な時期、「小野田セメント」が自社の白色セメントを無償で提供したことなどから、1950年代の日本では「セメント彫刻」による野外彫刻展が盛んに開かれました。この集合写真も「野外」彫刻展のように見えますが、実は東京都美術館の展示室で撮影されたものです。敗戦直後の上野公園は空襲で住むところを失った人々によって部落が形成されており、当時はまだ公園が整備されていませんでした。会員たちは、雨漏りのする美術館の彫塑室に鉢植えを持ち込み、花壇を模して、室内の「野外」彫刻展を実現させていました。

公園が整備されると、創型会はようやく上野公園緑地で野外彫刻展を開催します。第11回創型会展は「団地と彫刻」がテーマでした。殺風景な団地に彩を添えることを目的に彫刻が制作され、子どもが乗って遊べるような動物彫刻も展示されたようです。中野四郎の裸婦像《陽》(図2)は、上野公園で発表された後、住宅公社大蔵団地(世田谷区)に設置されました。

芸術家の創作活動は、人々のため、社会のために行われるべきであるという創型会の思想は、九元社の活動と通底するものがあります。彫刻家としての中野の足跡は、戦時下におけるモニュメントへの志向、戦後日本におけるセメント彫刻・野外彫刻展の興隆など、日本近現代彫刻史における重要な流れと重なり合っているのです。特集展示では、記録写真や機関誌『九元』などの資料も見どころです。貴重な作品と資料を快くご出展いただきました所蔵者の皆様に、心より御礼申し上げます。(S.S.)

※1 「創刊の言葉」『九元』1号、1939年12月、p.1

※2 中野四郎「協同製作の考察」『九元』5号、1941年10月、pp.2-3



中野四郎《陽和》1929年



図1: 第9回創型会展 1960年



図2: 第11回創型会展(上野野外彫刻展) 1962年